

竹内晶 卒業論文『血のパイプオルガン芸術 ——ヘルマン・ニッチュの芸術をめぐる スキャンダル分析』によせて

青山愛香

1938年生まれのヘルマン・ニッチュは、戦後のウィーン行動主義派（Der Wiener Aktionismus）を代表する芸術家である。絵画、音楽、舞台美術にまで及ぶその活動は、血と生贄を主要モチーフとするパフォーマンス「祝祭劇 Orgien Mysterien Theater」で集大成されたとされるが、その芸術は長らくスキャンダルとしてオーストリア国民に受け止められてきた。戦後のドイツを代表する現代美術作家ヨーゼフ・ボイス（1921-1988）の活動もニッチュと同様に常にメディアの批判にさらされたが、その教育、芸術、社会活動は80年代から日本でも紹介され、日本の現代美術に大きな影響を与えている。一方ニッチュの芸術は、日本ではほとんど知られていない¹⁾。

竹内晶氏の2007年度獨協大学卒業論文では、ニッチュ芸術をめぐる問題点が先行研究を十分に踏まえた上で多角的に扱われている。ニッチュの生い立ちと修行時代に始まり、ニッチュ芸術の土台となったウィーン行動主義派の運動を概観し（第二章）、続いて代表作となる1998年の祝祭劇「6日間の放逸な祝宴 das 6-Tage Spiel」がキリスト教およびディオニュソス信仰に基づいている点を紹介しながら、この劇において使用される宗教儀式用の道具を、図像学的に分析している（第四章）。ニッチュの祝祭劇はキリストの受難劇を独自の方法で解釈しているため、カトリック教会から激しい攻撃を受けているが、第四章ではカトリック教会が公にした抗議文をとりあげながら、カトリック教会と

1) ニッチュ芸術が日本において紹介された数少ない例として、山本現代画廊（東京）の「奇想の庭 chimerical garden」と題したグループ展（2005年12月～2006年2月）が挙げられる。

芸術との関わりについて分析が行われる。竹内氏は更に Pierre Bourdieu の「国家規範の芸術 die legitime Kunst」という概念を借りながら、誰が芸術を芸術として定義するのかという問題まで発展させて論じており（第三章、第五章）、その上で De Colle ならびに Sabine Reiter-Haydl の博士論文に依拠しながら、権力によって退けられるニッチュ芸術という観点からニッチュ芸術のスキャンダル問題を分析している（第六章）。今回の紀要論文は、特に卒論の第三章を取り上げ、加筆したものである。第七章および最終章においては、国家が芸術に深く関与するオーストリア社会の構造が紹介される。

ハンス・ベルティングが指摘しているように、第二次世界大戦後、ドイツの美術は大きな負の遺産を背負ったのであり、それはオーストリア美術も同様である²⁾。美術史学では 20 世紀初頭にウィーン学派が起こり、今日の美術史学の一つの基礎を作ったが、ウィーンでは特にこうした伝統的な美術史学の方法論ではなく、従来の価値を批判的に検証しようとする若い美術史家も多く登場している。竹内氏の論文は、二年間ウィーン大学の美術史講座で学んだ成果であるが、過去を批判的に捉え検証するという方法論は、今回の卒論がその多くを負っている De Colle (2001) ならびに Sabine Reiter-Haydl (2003) の二つの博士論文にもよく現れている。

現在日本において積極的に紹介されるオーストリアの芸術はグスタフ・クリムト、エゴン・シーレ、オスカー・ココシュカまでである。竹内氏は現代美術作家ニッチュ芸術の社会における受容という点に着目することで、日本ではあまり知られていない、現代オーストリア社会と芸術との依然として深い関わりを改めて浮き彫りにした点で、大変興味深い労作である。

2) Hans Belting, *Die Deutschen und ihre Kunst: Ein schwieriges Erbe*, München 1992. ハンス・ベルティング著／仲間裕子訳『ドイツ人とドイツ美術 — やっかいな遺産—』晃洋書房 1998 年。